

10 夕霧太夫墓所（浄国寺）

天王寺区下寺町1-2-36

- ▶ 夕霧太夫は、京都島原の宮島甚三郎抱えの遊女でしたが、寛文12年(1672)、21歳のとき大坂新町の扇屋四郎兵衛が鳴り物で迎えます。京美人ということもありたちまち人気が上がります。井原西鶴の著作「好色一代男」の中で夕霧太夫をべた誉めしています。しかし、扇屋に来てから6年後病気で亡くなります。亡くなって1ヵ月後、荒木与次兵衛座で「夕霧名残の正月」という歌舞伎が上演され、夕霧太夫の馴染み客伊左衛門を演じた坂田藤十郎が大人気となります。その後、坂田藤十郎は夕霧太夫の年忌ごとにこの芝居を上演し、計18回上演されたそうです。また、夕霧太夫の死から35年後に近松門左衛門作の「夕霧阿波鳴門」が評判となります。



この物語では、扇屋ではなく吉田屋が舞台となっています。夕霧太夫の墓は扇屋の菩提寺だった浄国寺に建てられます。初期の墓は、角型でしたが、「墓石を削りそれを飲めば病気が治る」という噂が広まり、破損してしまいましたので、文久3年(1863)、丸型の墓碑が再建されました。

11 真言坂

天王寺区生玉町13-9

- ▶ 生國魂神社北側にある南北の坂を真言坂といいます。生國魂神社の神宮寺だった法案寺をはじめとする生玉十坊が、明治の廃仏毀釈まで神社周辺で栄えていました。そのうち、神社の北側には医王院・観音院(坂の西側)・桜本院・新蔵院(坂の東側)・遍照院・曼陀羅院(坂の下り口東側)の六坊がありました。すべて真言宗だったので、真言坂とよばれました。



12 英国外交官 アーネスト・サトウ宿泊の地跡(本覚寺跡) 中央区中寺2

- ▶ アーネスト・サトウは、文久2年(1862)8月、生麦事件の直前に、駐日イギリス公使館付の通訳生として、19歳ではじめて日本の土を踏んでから、幕末・維新の動乱期を目撃し、その間、その地位は通訳官、日本語書記官と昇進を続けて、明治15年に至りました。その後バンコク(タイ)、モンテビデオ(ウルグアイ)、タンジール(モロッコ)での勤務を経て、やがて明治28年(1895)、日清戦争直後の日本に公使として帰任し、明治33年(1900)に駐清公使に転じるまで、その職にありました。サトウの日本勤務は、通算すると約25年に及びます。サトウは日本語が大変堪能でした。「サトウ」という名前が日本で多いことなどから、日本人の血が流れていると思われがちですが、サトウの祖先はドイツに住んでいました。バルト海の港町ヴィスマールという町の中にSatow(種を蒔く人の村という意)という地名があり、この地名から姓名になったようです。この地ではありふれた姓だそうです。



アーネスト・サトウ

<初めての来坂>

初めて大坂に来たのは慶応3年(1867)1月7日です。来坂の目的は、将軍徳川慶喜が外国公使謁見を予定している日時とその準備状況。イギリス公使の宿舎が適当であるかどうか。そして大坂の町の商業活動、兵庫開港及び大坂開市に対する住民の感情を視察することでした。アーネスト・サトウの日記によると次のような記載があります。

天満橋を渡り、川に沿って左折し、さらに右折して、ほとんど果てしないような道を行くと、とうとうわれわれの宿舎である寺町の本覚院(寺)にやってきた。街のすこしはずれである。

翌日の1月8日、漆器を買い求めに心齋橋筋に出かけ、9日には四天王寺を探索しています。

9日の午後薩摩藩士 吉井幸輔(のちの友実)が、サトウに会うため本覚寺を訪れています。

10日、北御堂と南御堂を訪ね、大坂の町を探索します。

11日には、再び吉井幸輔が小松帯刀を伴って本覚寺を訪ね、朝食をとっています。小松と吉井は、朝食に出たパテ・ド・フォアグラとビールが大いに気に入ったようです。

12日、今度は逆にサトウが薩摩藩大坂蔵屋敷を訪ねています。

13日、大坂東町奉行の竹内日向守幸彝(ゆきつね)が、11日の夜に続いて本覚寺を訪ねて会談しています。



薩摩藩 家老 小松帯刀



本覚寺跡



本覚寺が移転する前の古地図

サトウの日記には、最初の大坂出張を記念してか、関係者一行の集合写真が添付されています。撮影したのは、浪花心齋橋北詰塩町角 写真師中川信輔で宿舎本覚寺の庭で撮影したものと考えられます。一緒に写っているのは、イギリス外交官ミットフォード、イギリス第九連隊カーデュー大尉、デンマーク士官タルビッツァー少佐、サトウの従者 野口富蔵、サトウの下僕 安次郎、ミットフォードが北京から連れてきた中国人 林福と亜金です。



野口富蔵

亜金

林福

安次郎

ミットフォード

アーネスト・サトウ

カーデュー大尉

タルビッツァー少佐

<2回目の来坂>

サトウは、慶応3年3月、公使ハリー・パークスと共に来坂しました。宿舎はサトウの日記によると、本覚寺を中心に3つの寺が割り当てられたとありますので、2回目の来坂で本覚寺に宿泊したかどうかの決め手はありません。

<3回目の来坂>

慶応3年7月、北陸の視察を終え、7月23日大坂に到着します。本覚寺で宿泊することになります。到着翌日、公使パークスも大坂に到着し、長崎で起こった「イギリス軍艦イカルス号水夫2名殺害事件」をサトウらに伝えます。この事件についてパークスと幕閣 板倉勝静との交渉、さらにはパークスと徳川慶喜との大坂城での謁見が行われています。詳細については前記のとおりです。大坂城謁見の当日早朝、7月27日、薩摩藩士 西郷吉之助が本覚寺にいるアーネスト・サトウを訪ねます。そして28日には、サトウが西郷吉之助を訪ねるため出かけています。詳細は次の項で取り上げます。この本覚寺は移転し、当時あった場所にはマンションが建っています。さて、アーネスト・サトウはこのイカルス号事件解決のため、長崎で才谷梅太郎と称する海援隊長 坂本龍馬と出会います。

慶応3年11月15日 坂本龍馬遭難について
サトウはイギリス人ですから日記は、当然太陽暦が使われています。西暦1867年12月8日の日記では次の内容が書かれています。

「12月8日 日曜 骨董品あさりに出歩いたこと以外は、終日無為にすごす。(以下省略)」

1867年12月8日は陰暦で慶応3年11月13日に該当します。従って、坂本龍馬が暗殺された11月15日は、陽暦で1867年12月10日火曜日ということになります。



坂本龍馬像